



コハク

琥珀/Amber

10mm

産地：千葉県銚子市
時代：前期白亜紀
GSJ M07979

虫入り琥珀

産地：ドミニカ共和国
時代：古第三紀漸新世
GSJ F17258

1mm

コハクは、樹木の幹から染み出した樹脂が地層中に埋没し、長い時間をかけて硬化した化石です。白亜紀から古第三紀の温暖な時代に、針葉樹のような樹脂の分泌が盛んな樹木が繁栄して大規模な森林が発達しました。そのため、これらの時代の地層からはコハクが多く見つかっています。色は飴色、赤褐色、黄色など幅広く、透明感のあるものは宝石として重宝されています。ただし、コハクは規則的な結晶構造や単一の化学組成をもたないことから、鉱物とは定義されていません。

コハクは世界各地で宝石として採掘されており、生産量の8割以上を占めるバルト海沿岸地域産（約4,000万年前の古第三紀始新世）、ドミニカ共和国産（約3,000万年前の古第三紀漸新世）、ミャンマー産（約1億年前の白亜紀）が有名です。日本では岩手県久慈市（約8,500万年前の後期白亜紀）や、千葉県銚子市（約1.2億年前の前期白亜紀）等の地層から産出することが知られています。写真の3つ並べた標本は銚子市産で、透明度の高い美しいコハクです。

樹脂が埋没する際に、まわりの生物をその中に取り込み、そのまま化石となることがあります。特に昆虫を含むものは「虫入り琥珀」と呼ばれます。左下の写真はドミニカ共和国産の標本です。ほかにもクモ類や植物の繊細な組織、動物の毛や羽毛のような通常は化石として残らない軟体部分も見つかっています。コハク中の化石は3次元的形状も残したまま極めて良好に保存されており、当時の生物相や進化の解明に役立つと期待されています。このように“太古のタイムカプセル”とも言えるコハクは、学術的にもとても重要なのです。

(地質標本館室 兼子尚知〔文、写真〕)